

[戯曲の翻訳について]

柴田耕太郎*

0、はじめに

前年度『明星大学紀要 第14号』に掲載された、和田正美の論文『シェイクスピアの或る場面の翻訳について』を興味深く読んだ。

円満な教養人たる和田のような人物が、翻訳戯曲に関心を寄せたことを嬉しく思ったのと、そうした教養人が劇芸術をどのように見ているかが分かったからである。

大方の主張は納得できるものであるし、その提言にはなるほどとうなずけるものがある。それでも、生活のためには翻訳を、また、生きがいとしては演劇を、ともにプロとして携わっている身としては、専門家の立場から一言しておきたい部分もあるので筆を執った。

これから述べる論考は、この種の紀要で見られる「学術論文」の体をなしてゆかないと思われる。学問とは「体系化された知識の総体」であり、事実を積み重ねそれを論理的にまとめたものといえようが、「翻訳」は経験則が断片的に偏在する分野であり未だ学問とはなっていないし、「演劇」も、理論はともかくここで扱う実践部分については、やはり然りといえよう。

だがこうした経験則を積み重ねることで、やがては集大成された「翻訳理論」「演劇理論」が生まれるであろうことを願って、現場での経験を基にした意見を以下に開陳する次第である。

1、翻訳の姿勢

次のような英文があったら、どう訳せばよいだろうか。

She gave me one bottle of 78' Chateau Lafite Rothschild.

産業翻訳家は、こう訳す。

「彼女は七八年産のシャトーラフィット・ロートシルトという赤ワインを一瓶、私にくれた。」

いささかくどいきらいはあるが、原文は漏らさず、前置詞の意味まできっちり訳している。しかも、このワインが赤であるという常識も織り込んでいる。

出版翻訳家は、こうだ。

「彼女は一本のワインを私にくれた。シャトーラフィット・ロートシルトの七八年物。」

178
(63)

* 言語文化学科 非常勤講師

訳し漏らし、訳しすぎのないよう注意しながら、読者、作者の意識の流れを切らないよう配慮している。

吹替翻訳家なら、こうする。

「あの娘がくれたワインは極めつき、七八年のシャトーラフィット。」

長さを口の動きに合わせるのが使命。また、耳でわかる言葉にしていくのが大切。

同じ映像翻訳でも、字幕翻訳家だと、どうなるか。

「極上のワインをくれた。」

そっけないかもしれない。だが、字幕には、映画で十字×二行、テレビ（ビデオ）で十四字×二行という制約がある。できるだけ短くすることが必要だ。

ならば、戯曲翻訳家は、どう訳すか。

「あの娘はくれた。赤の最高品シャトーラフィット七八年」。

台詞とアクションの一致をはかったうえで説明訳を入れ、しかも長くならないように配慮する。

ことほどさように、分野、目的により、訳すスタンスは変わってくるのだ。

産業翻訳は読みやすさを犠牲にしても誤読（間違った内容理解）がないようにする。出版翻訳は誤訳の指摘が怖い。正確に、かつ音読に耐えられるよう（実は読むという作業は頭の中で音を出しているのである）リズムをつける。吹替は口の動きとぴったり合うこと、字幕はきちっと筋を追うことが命。ここに至っては翻訳というより創作に近くなる。「日本語版台本」といわれることが多いのも、そのためである。

戯曲が、私にいわせればいちばん難しい。正確でなければ、テキストを俳優が読み込むことができない。それでいて原文より訳文が長くなれば（往々にしてありがち。そのまま訳すと1.5倍の上演時間になる）演技が間延びする。そのうえで台詞とアクションを一致させるとなったら、これは絶望的としかいいようがない。

これらの問題をどう乗り越えるかをめぐって戯曲翻訳家は苦吟し、諸家それぞれ工夫をこらすわけだが、一つの台詞でたまたまこれがうまく決まった例を紹介したい。

（福田恒存『私の演劇教室』《玉川大学出版部》より、レジュメ）。

Speak, hands, for me!

シェークスピア『ジュリアス・シーザー』で、ブルータス一味の陰謀が露見し、シーザーに切りかかる場面。Speakで柄に手がかかる、handsで刀を抜く、for meで切りかかる。三つの音の区切り、三つのアクションをできるだけ原音の長さで、意味も合わせ、訳さねばならない。

福田は見事、こう訳した「この手に聞け！」。

ちなみに英文学者、中野好夫の訳は「こうなれば、腕にものをいわせるのだ！」

こちらは、歌舞伎で見得を切る場面なら合いそうだが…

2、精確に読む

当たり前のことだが、翻訳はまず精確でなければならない。和田の提示したシェークスピア『ヘンリー四世』の原文と諸訳（和田の挙げる坪内逍遙、中野好夫、小田島雄志の三訳）を照らし合わせてみた*註。

Re-enter Hastings.

Hast. 1<My lord>, our army 2<is dispersed> already :
Like 3<youthful steers unyoked>, they take their courses
East, west, north, south 4< ; or, like a school broke up,
Each hurries toward his home and sporting-place >.

West. Good tidings, my Lord

Hastings ; for the which

I do arrest thee, traitor, of high treason ;

And you, 5<lord archbishop>, and you, lord Mowbray,

Of capital treason I attach you both.

Mowb. 6<Is this proceeding just and honourable> ?

West. 7<Is your assembly so ?>

Arch. Will you thus break your faith ?

Lan. I pawn'd thee none :

I promised you redress of these same grievances

Whereof you did complain ; which, by mine honour,

I will perform with a most Christian care.

But for you, rebels, look to taste the due

Meet for rebellion and such acts as yours.

Most shallowly did you these arms commerce,

Fondly brought here and foolishly sent hence.

Strike up our drums, pursue the scatter'd stray :

God, and not we, hath safely fought to-day.

8 9<Some guard these traitors to the block of death,

Treason's true bed and yielder up of breath.>

[Exeunt.

演劇や英語の専門家でなくとも、多少なりとも教育を受けた読者なら、一読して次のような疑問が浮かぶのではないだろうか。

1. 小田島訳のみ My lord を「大司教閣下」（他訳は「閣下」）と訳しているが、何故だろうか？

2. 「退散しました」(逍遙訳)と「退散しておりました」(小田島訳)とでは、だいぶ感じが違うがどちらが正しいのだろうか？
3. 直訳は「頸木をはずされた食肉用の去勢されたはつらつとした雄の子牛」→「自由に解き放たれた元気な子牛」だが、「子牛」を「若駒」(坪内、小田島)「若牛」(中野)としてよいのだろうか？
4. 「又は小学校の放課後という風で、めいめい家路へと、遊び場へと。」(坪内逍遙・訳)にほぼ倣った訳を中野好夫、小田島雄志もつけているが、中世に小学校があったのだろうか？
5. 逍遙訳「大監督」はともかく、lord archbishopを「大主教閣下」(中野)、「大司教閣下」(小田島)と訳語が分かれるのはどうしてだろうか？
6. 7. 「さういうことをなさって、それで公明正大といへますか？」「足下たちの暴挙が然ういへるか？」(坪内逍遙・訳)にほぼ倣った訳を中野好夫、小田島雄志もつけているが、貴族同士がこんな売り言葉と買い言葉の応酬をするだろうか？
8. 「謀反人の正当な臥床でもあり終焉所でもある斬首台まで警護して行け」(坪内逍遙・訳)と同じく、「正当な臥床」(Treason's true bed)イコール「終焉所」(yielder up of breath)として中野好夫、小田島雄志も訳しているが、名詞の並列でないものを同格に訳せるものだろうか？
9. the block of deathを、坪内は「斬首台」、小田島は「断頭台」と訳しているが、同じ意味なのだろうか？

本当の翻訳作業は、文法力・論理力・教養力・表現力を駆使し、こうした疑問に答えることから始まる。このいわば「苦しい楽しさ」を貫いて得た結果は次の如し。

1.
My lord は、侯爵以下の貴族への略称での呼びかけ。公爵なら Your (His) grace または Prince となる。小田島訳は、誰に対して言った言葉かをはっきり示している。
2.
disperse は (1) 他動詞「…を追い散らす」、(2) 自動詞「散らばる」のうち、文脈から (2)。自動詞の過去分詞は状態をあらわす。または、dispersed を過去分詞形の形容詞ととる。正確な直訳をすれば「(すでに) 散らばった状態である」。逍遙訳、中野訳、小田島訳とも、力点を行為に置くか状態に置くかの違いであって、いずれも可。
3.
勝手に動き回ることでできる例(そういった類のもの)として挙げられたのだから、「若駒」でも「若牛」でも翻訳で許される範囲。
4.
・ ; or は (1) 選択「あるいは」(2) 換言「すなわち」のうち、例示 (like) に力点を感じれば (1)、具体化 (take their course → hurries toward his home and sporting-place) に力点を感じれば (2)。ここはどちらも可。
・ 「放課後」なら不可算名詞で school になるはず。

- ・ break up は、「一日の授業が終わる」でなく、「休暇になる」の意味。
- ・ ヘンリー四世 (1366-1413) の時代には、教師の質も生徒の年齢もまちまちの寺子屋的なものはあったが、我々がイメージするような「小学校」は存在しない。制度としての学校はもっと上級のグラマスクール (大学入学準備のため主にラテン語を学ぶところ)、大学 (ケンブリッジ、オックスフォード) のこと。
- ・ a school と可算名詞がついているのだから、漠然としたものではなく、「スクール」で当時の人が思い浮かべるはずのもの、つまり上記の高等教育機関を指すのではないか。
- ・ そこでの学生は大方遠方から来ているはず。home の訳は「家路」でも間違いではないが、意味するところは「帰郷」であろう。
- ・ sporting-place は「遊び場所」ではあいまい (遊園地とか原っぱを想像してしまう)。「歓楽街」→「悪所」→「遊郭」→「娼家」であろう。

その理由：(1) 学業から解放された学生が散ってゆく場所、が示唆されている。

(2) place は ground と違って「ある特定の目的のための場所」をいう。

(3) place は house の意味で使われることがある。

(4) sporting house で「娼家」の意味がある。

それで、この箇所をしつこい直訳にすれば「すなわち、大学などの学期が終わったかのように、銘々がある者は故郷へと、またある者は歓楽街へといそいそ散って行きます。」

5. 「大主教」は、英国国教会での高位聖職者の呼称。英国国教会はヘンリー 8 世 (1491-1543) 時代にできたもの。ここはそれ以前なので「大司教」が正しい。

6. 7.

- ・ just は、この場合「神の義にかなった」(この少し前の、ランカスター公がモーブレイ卿に対し「神の代理人である王」に逆らう非道を叱責する場面が伏線となっている)。
- ・ honourable は just の同義語反復 (似た意味を重ねるのは英語でも日本語でもよくある)。
- ・ 同義語反復で後にくる語は、意味が弱くなる。前の語だけの意味を考えればよい場合もあり、ここもそう考えられる。
- ・ このやりとりを論理的に読み解けば「こんなやりくち (騙し討ちのような) は神の義にかなわず恥ずべきものだ」といわれたのに対し、「そもそもお前たちの集会 (神の代理人である王に対する謀反、を含意)こそ神の義にかなわず恥ずべきもの」(だから、それを退治するのに騙し討ちぐらいは構わないのだ、を含意)と反駁している、こととなる。

8.

- ・ Some (誰か)、guard (見張れ：命令形)、to (…まで)
- ・ the block of death と Treason's true bed は、同格で言い換え「斬首台、すなわち反逆者の真の寝台」。
- ・ and は guard と yielder を並列 (yielder up of breath を名詞的に Treason's true bed と並列させたり、形容詞的に掛けたりする注釈書もあるが無理ではないか)。
- ・ yielder up of breath は、他動詞で目的語が省略された yielder up these traitors of breath ととり、かつ多義である yield (yielder はその古形) の意味を「(人に) 渡す」ととる。of は、関連を示すものととる。「息に関し、これら反逆者を引き渡せ」→「こいつらの息の根を止めろ」。

・全体では、「誰か、この反逆者どもを裏切り者の真の寝床である斬首台に連れてゆき、息の根を止めてやれ」。

9. the block of death は「死のまな板」が直訳。the が冠されて特定化され、「断頭台」となる、と言いたいところだが、「断頭台」というとギロチンが想像されるが、ギロチンはフランス革命の際に発明されたもの（祖型のひとつはイギリスにもあるが）。この時代にはそぐわない。「首切り台」「斬首台」とでもすべきところ。

細かすぎる、という向きには、「縛り首」と「つるし首」は同じかと聞きたい。「縛り首」は時代劇によくでてくる日本の刑罰であり、「つるし首」は西部劇などに見られる刑罰。ここは「子牛」「若牛」「若駒」といった例示ではなく、具体的なものなのだから語義にはこだわらなくてはならない。

3、演出家の誤訳

フランスの劇詩人ジャン・ジロドゥの傑作戯曲『オンディーヌ』的一幕初め、騎士ハンスと老漁師夫婦のいる小屋にオンディーヌが登場しハンスを見初める場面がある。オンディーヌは「綺麗な人」と一声を発し、そのあと「何か訳があると思っていたの、娘であることに。それは男の人が綺麗だからなのね」とつづけるのだが、これを数十年前に見た劇団四季の舞台では、「綺麗な人」を、騎士ハンスに向かって言っていた。だが、この原文は *Comme il est beau*. (彼は何と美しいのであるか)。だから、老夫婦に向かって言ってもらわねばならないところなのである。

これもかなり前の話になるが、『アンソニーとクレオパトラ』を観劇していたら、「我らここに超然として在ることを」の台詞をふたりがベッドでいちゃつきながらしゃべっていた。原文は、*We stand up peerless.*。もう少し長く引用すれば、*I bind ... the world to weet (that) we stand up peerless.*。weet=know だから、「我々が比類なき存在であることを世間に知らしめてやる」といった意味だろう。stand up をどう訳すかが難しいところだが、どう訳してあったにしろ、ここは、stand up して語ってもらいたい。いかにクレオパトラに夢中になっているアンソニーとはいえ、ベッドでいちゃつきながらしゃべる言葉ではあるまい。

これらは、演出家が日本語台本だけ読んでいるために起こる「誤演出」といえよう。

また、ピンター（ハロルド）の『夜あそび』では、主人公の青年を周囲の若者たちが、親と住んでいていいねとからかう場面があるのだが、私の観た舞台の主人公はまったく無反応だった。これでは、日本の観客にはなんのことだかさっぱりわかるまい。20歳すぎて母1人子1人で同居しているのは、イギリスでは典型的なマザコンなのである。これは演出家の異文化理解の程度の低さのあらわれ。

さらに、『ママの貯金』（ドゥールテン・作）を観ていたら、うらぶれた下宿人の男がワーズワースの詩（『虹』）を朗ずる場面が気にかかった。「子供は大人の父である母である」。原文は *The Child is father of the Man*. 母のほうが自然なのにとあって、偉大なる名句とも知らずに付け加えたのだろうが、観客を軽くみているとしか思えない。こちらは、演出家の

教養の無さの証明。

どんなに上手く訳したところで、日本語台本と原文との間には誤差が生じてしまう。これが思わぬ形で広がったのが上記の諸例であるが、これらの上演台本の該当箇所が誤訳・悪訳であったわけではない。

それが、不正確な訳の台本ともなれば、誤差どころでなくテーマ自体を読み間違えることにもなりかねない。だからこそ翻訳家諸氏には、上手さと同時に精確な翻訳を望みたい。

また、演出家諸氏にも勉強を願いたい。劇団民藝を主宰していた故・宇野重吉が、『桜の園』を演出するにあたり、どうしても理解できない表現があって、最初は訳者、それからロシア文学者、さらにソビエト大使館と訪ね歩き、とうとうアエロフロートに乗ってモスクワまで行ってしまったことがあった（宇野重吉『桜の園について』）。演出家も人の子、スーパーマンではありえないはずだが、原文と照合する、事実関係を確かめる細心の注意を払って演出にあたってほしいものだ。

4、三訳の検討

・先達への依存（逍遙訳）

「坪内逍遙の訳が間違っていると、後からの訳もみんな間違っている」とは、演劇ズメが酒飲み話でささやき交わしていることだ。今回の和田論文で提出された既訳三種をくらべると、いずれも2、4. で検証した「小学校の放課後…」の箇所その他が間違っている。

「そうした意味で、ほとんど誤訳のしようもないのがシェイクスピアである。あれだけ註釈、研究が完備していたのでは、誤訳をする方が困難である。あれでまちがえば、よほどの愚物であり、単に正解というだけなら、およそシェイクスピアほど楽な作品はないかもしれぬ。」とは中野好夫の弁だが、するとここは「中世の小学校の放課後の風景」とでも諸註にでているのだろうか。

その中野は、こうも言っている。「翻訳なんてあとからやったほうが良いに決まっている。でなければやる意味があるまい」。先人の訳を参照するのはおおいに結構だが、「和文和訳」するような態度はどうかと思う。

誰であったかイギリスの文豪が「シェイクスピアの全集がある国が文明国なのだ」といったというが、それを信ずるならば、坪内逍遙が死んだ年、中央公論社版『新修シェイクスピア全集』全40巻の完結した1935年をもって、日本は文明国になったわけだ。だが坪内逍遙は一篇につき一回の訳で満足していたわけではない。逍遙のシェイクスピア訳は何度も改訂されており、浄瑠璃調、雅文調、歌舞伎調、文語口語交錯調、を経て口語調の決定版に落ち着いたのである。そのあとの訳者はいずれも逍遙の苦吟と試行錯誤を重ねた末に誕生した口語調を踏襲発展させている。誤訳箇所が皆同じでバレてしまうように、あとからの翻訳者のアンチヨコになっているという点だけでも、この先達の功績は大いにあるというものだ。

・中間訳の是非（中野訳）

中野好夫は文庫版『ジュリアス・シーザー』のあとがきで、「上演と読み物の間を狙って

みた」旨を述べているが、そんな都合のよい翻訳はありえまい。舞台なら言葉のリズムと切れと早さが必要だし、読み物ならわかりやすさが優先されるからだ。仏文学者の辰野隆が語る、「(略) 始めから終わりまで妙に気がさして観ていられなかった。一座の俳優の芸が観ていられないのではなく、僕らの翻訳の拙さ、甘ったるさが…原文も無論だが…どうにもこうにも我慢が出来なかったのである」といった謙虚さは、中野には見られない。中野にとっては、戯曲の翻訳は生活費稼ぎのひとつだったのだと思われる。

「そういえば近ごろ、既訳の数種と自家の訳文とを並べて見せて、しきりと自家訳の優秀さを宣伝している翻訳家がいるそうである。誰だかは聞き落としたが、なんとかそんな愚物にだけはなりたくないと思っている。」これは福田恒存への皮肉（これを読んだらしい福田は、それでも戯曲翻訳論は必要だと、熱く語っている）だが、同じ英文学者でも、戯曲翻訳を芸のうちのひとつと考えた中野と、自分の香典はいらないから自前の劇場をつくる費用にカンパしてくれと知り合いに頼んだ福田の姿勢がでているのではないか。

・日本語の破壊（小田島訳）

その福田は小田島雄志の翻訳をひどく腐している。その理由は英文和訳的、リズムがない、言葉が卑俗に流れている、等だが、特に声を大にしているのは、言葉遣いが正しくない、との批判である。

「この間、小田島氏訳の『オセロー』を観ていた時、『耳に中傷を注ぐ』とか『中傷をでっちあげる』とかいう言葉が私の耳に注ぎ込まれ、すこぶる気になった。(中略) その時、『中傷』とは誰かを陥れる為に事実無根の事を他人に語る行為そのものを意味するのであるから、そういう行為を耳に注ぎ込んだり、でっちあげたりは出来ない、あそこは『中傷の言』『中傷の言葉』でなければならないと言ったのに対し、小田島氏は紙上で『あれでおかしくなく通用したらそれでいい』と答えていた。」の言は、その一例である。ここにおいて、和田と福田の意見は一致する。すなわち小田島訳は、日本語の破壊である、というのだ。

・三者の特徴

そこで、多少舞台の現場も知っていて、自ら翻訳も手掛ける論者の意見を簡潔に述べてみよう。

坪内訳は、当時の立派な口語日本語である。だが、在来の芸能日本語（歌舞伎などの表現、言葉）に擦り寄りすぎたため、現代では言葉が古めかしくなっている。

中野訳は、本人もいうとおり舞台と読書をかねようとするため、中途半端になってしまっている。上演用としては適さない。

小田島訳は、和田、福田のいうとおり、日本語として正しくない表現が多い。だからダメかという、これが難しいところで本稿を書く動機ともなったものの一つなのだが、少なくとも早くしゃべるといふ点では優れているのである。

5、和田説の検討

- ・これは五十数年前のことであり、翻譯劇の在り方をめぐる文學者達の不満（論者註：譯文があまりに散文的であること）はそのままの形では現代の状況に當て嵌まらないかも知れないであらう。
- 語学教師の訳はすたれ、現場人の訳が主流。その分、文學者たちの不満は多少解消されると思われるが、安易なテキストレジ（広い意味での原作の改変）に流れる傾向もみえる。
- ・自分のことを書くと、私は翻譯劇が舞臺で上演されるのを観ることは稀にしかないが、それを活字で読むことは時々ある。私の読み方は小説を読むのとほとんど同じであり、筋を追ひながら読んで行くのだが、よく考へると、これでは戯曲を戯曲として扱つたことにはならないであらう。
- 劇場に赴くのではなく、戯曲を文学作品として読むのは、ふつうの教養人の姿としておかしくはない。『安楽イスで読む芝居』という名の戯曲もあるくらいだ。ただその場合、読まれることを意識した訳文の提供が必要となろう。
- ・私にはこの My lord は自軍の大司教ではなく敵軍のランカスター公を指すのではないかと思はれるが、…
- 2、1. で指摘したように、My lord は侯爵以下の貴族への呼びかけだから、ランカスター公を指しはしない。
- ・それはヘイスティングズ卿のこの臺詞（論者註：自軍が解散し、戦が避けられることを、述べる）は卿自身の喜びと兵士たちの喜びを同時に表すものであるべきだといふことである。喜びは二重のそれではなければならない。さう考へて、臺詞の終りのところに、「それはうれしさうでした」といふ一文を挿入したらどうか、そして演出家は俳優にこれを發聲する時には特に注意するやうにと指示したらどうか、といふのが私の案である。
- 個人的解釈・説明台詞はなるべく入れないのが戯曲翻訳の基本。演出家に任せる部分だからである。
- ・息子が離れて暮す母親に書き送る手紙の冒頭に My dear mother と記されてゐるからといつて、これを『我が親愛なる母上』とか『僕の親しいお母さん』とか譯すには及ぶまい。單に『お母さん』と譯せば充分であらう。
- 文化風習を移すか、人間感情を移すかは、翻譯者が昔から頭を悩ます問題である。イブセン『人形の家』の長らく使われていた台本で、夫がヒロインのノラに放つ第一声は「そこで囀っているのは、私の可愛い小鳥さんかい」となっていた。ノルウェーでは夫が妻にこういった甘い言葉をしょっちゅう掛けるのだ、ということを示したければこの通りでよいだろうし、同じことを日本人の夫ならどう言うかとの視点に立てば、意識した言い方で訳すだろう。翻譯者の姿勢と、演出家の考え方によって決まるもの。
- ・武人といふ言葉の日本的な響きも多少氣に掛る。
- これは感じ方の問題。確かに、外国の作品を翻譯するのなら訳語をなるべく和臭から遠ざけた方がよい。論者も昔、プールバール劇（軽いブルジョワ演劇）の翻譯物を観ていたら、「新派大悲劇じゃあるまいし」という台詞が飛び出してきて、心地よい夢から醒めたことがある。一応フィクションで、フランスの芝居を擬フランス人が観ているという前提で芝居が進んでいるはずだが、そこに突然、日の丸日本、それも大正ロマンを彷彿させる言葉が浴びせかけられれば、違和感を抱くのは当然。翻譯はやはり、読む人（観る人）の意識

- を寸断しないよう配慮しながら訳す（説明する）ことが必要。上記の場合なら、「グランド・ロマン」ぐらいであれば、帝劇グランド・ロマンの匂いはするが何となく洋ものっぽくて許せるだろう。「武人」については、私はこのままでよいと思うが、観客が「日本的な響き」を感じそうだと演出家が判断すれば、その場で直しを入れるだろう。
- ・「これが騎士のすることか」という譯文を作成したが、これを劇場で聴くと何のことかわからないおそれがあるといふ気がしたので、アクセントをつけて、「これが男のすることか。騎士たるもののことか」と譯し直して見た。
- 音への配慮は、戯曲翻訳についてはきわめて重要。演劇人でない和田がそこに目が行ったのはすごいことだと思う。だがこの場合、舞台では戦闘衣装を纏っているのである。元のまま音の意味は十分伝わるはずだ。
- ・私は大司教の臺詞を、「信義に基いて固く誓ふと言つておきながら、その約束を破るおつもりか」と譯して見ることにする。
- 原語 (Will you thus break your faith?) よりいささか長くはなるが、ここは見せ場なのでこうして歌い上げた（俳優が気持ちよく朗じうる台詞回し）訳もよいだろう。
- ・こんな臺詞をしゃべらなければならない俳優に同情したくなる。（論者註：小田島譯の不自然な日本語を指して）
- 加えて、聞く立場の観客にも同情したい。だが、小田島雄志には、ほかの何を犠牲にしてもとにかく俳優が速くしゃべることのできる台詞を作りたい、という気持ちがあると思われる。
- ・そして fondly と foolishly は中野譯のやうに動詞から切離して獨立させるが、これは相手罵る「馬鹿者め！」としておきたい。
- 品詞の轉換はあらゆる翻訳で許される範囲内。
- ・ところで私はこの命令に、「一人でも生かしておくな」といふ一文を付け加へることにしたいと思ふのだ。（略）それならどうしてさういふことをするのかといえば、翻譯者の自由といふ假説に心が向ふからである。（略）そしてこの追加の臺詞は叛亂主謀者達の處刑命令の先觸れをなすといふ効果を持ちほしんだらうか。
- 前にも述べたが、含みは俳優、演出家の想像力・瞬発力に任せるのがよい。あまり訳し込みすぎると、演技のふくらみがなくなってしまう。
- ・モーブレー な、なんだと。これでは騙し討ちぢやないか、これが男のすることか。騎士たるもののことか。（論者註：Is this proceeding just and honorable? 部分の和田の試譯）
- これは原文を解きほどいた、業界で言う「説明訳」にあたる。説明訳は場を得れば、優れた効果を生むが、場をはずすとくどく感じられてしまうので、微妙なところ。
- ・舞臺での上演時間を考えれば、短い臺詞を長々と譯出することには問題がある、と言はれてしまふかも知れない。（論者註：和田が自分の試譯を評して言っている箇所）
- あとで述べるが、長さが戯曲翻訳の一番の問題。
- ・それでもこの程度の長さの戯曲の翻譯に一年も二年も掛けることには私自身反対である。
- 翻訳も商品である。学者の道楽でもない限り、生活のためにも時流にはずれないためにも短期で仕上げるに越したことはない。

6、和田訳の批評

まず、和田の試訳を掲げる。

ヘイスティングズ

閣下、我が軍はもう散り散りになつてをります。まるで軛を解かれた若駒のやうに、東へ西へ、南へ北へと進んで行きます。その姿は學校で一日の授業を終へた生徒に似てゐるとも申せませうか。めいめい我が家を目指し、遊び場を目指して急いでをります。それはうれしさうでした。

ウェストモランド

さうか、それはよかつた。では、ヘイスティングズ卿、その方を國家叛逆罪で逮捕する。大司教、その方もだ。モーブレー卿、その方もだ。二人とも大逆罪で逮捕させてもらはう。

モーブレー

な、なんだと。これでは騙し討ちぢやないか、これが男のすることか。騎士たるものすることか。

ウェストモランド

ほう、それでは訊くが、烏合の衆をかたらつて叛亂を起すことが我々の騎士道にかなつてゐるといふのか。

大司教

信義に基いて固く誓ふと言つておきながら、その舌の根も乾かぬ内に、その約束を破るおつもりか。

ランカスター

約束などした覚えはない。いや、約束といへば、お前達が並べ立てた不平不満の數々を取り除かうとは言つた。それは確かだ。そのことなら、このランカスター、名譽に賭けて、またキリスト教徒の本分をもつくして、必ず實行して見せよう。しかし、それはそれ、これはこれだ。お前達は叛逆の大罪を犯した以上、それ相當の處罰を免れないぞ。

考へて見れば、お前達は薄つぺらな戦争を始めたものだ。ふん、手下の連中をのこのこ連れて來たかと思ふと、そいつらをあつさり解散させてしまふなんて。馬鹿者め。開いた口が塞がらないとはこのことだ。いいか、軍鼓を鳴らして、散らばつた奴らを追撃するのだ。一人も生かしておくな。それにしても今日の勝利は神の御業であつて、我らの力とは言ひ難い。ああ、よかつた。

さあ、この者どもを斷頭臺に連れて行け。國王陛下に叛逆を企てたこいつらにとつては斷頭臺が死の床なのだ。そこに寝かせて息の根を止めてしまへばいいのだ。

僭越ながら、以下論者の批評を記す。

これは『安樂椅子で読む芝居』としては秀逸の出来である。本になつた戯曲は読みにくく、傑作といえども途中で投げ出してしまふのが、大方の経験されたところではなからうか。和田訳は、小説の中の会話を読むように頭にすーっと入ってくる。これからの戯曲翻訳の一つ

のモデル、つまり「読み物としての戯曲」といえよう。

だが、訳文が全体的に長すぎるし、丁寧すぎる訳のため演出と演技のふくらませる余地がなく、上演用としては適さない。(該当部分の台詞訳出字数は、坪内訳が487字、中野訳が564字、小田島訳が532字、和田訳が747字)

修正必要と思われる箇所は次の如し：

- ・「その姿は学校で一日の授業を終へた生徒に似ているとも申せませうか」→「その姿は期末を終えた学生に似ているとも申せましようか」(誤訳)
- ・「騙し討ちぢゃないか」→「騙し討ちではないか」(俗ないいかたは避ける)
- ・「手下の連中」→「家来ども」(山賊ではあるまい)
- ・「軍鼓」→「鼓」(音ではわからない。読み物としてならよい)
- ・「ああ、よかった」→削除(読み物としても、安っぽい言葉)
- ・「断頭台」→「首切り台」(時代考証)

さて、坪内逍遙、中野好夫、小田島雄志、そして和田正美の訳文を、俳優に実際に読み比べてもらったら、どういう感想が得られるだろう。そう思って、ニナガワ・シェークスピアほかで活躍し、エジンバラ演劇祭では『あらし』のプロスペロー役で絶賛を浴びたベテラン俳優、壤晴彦に朗読してもらった。

その際の条件は、次の如し：

- ・台本を手にした立稽古を想定
- ・別人の台詞に変わる際は一呼吸入れる
- ・声音は変えない
- ・台詞回しは壤の(i)標準速度 (ii)早回し速度、とする

その上で、次の評定をもくろんだ。

- ①台詞を読み終わるのに掛かった時間 (i) (ii) ②台詞のしゃべりやすさ ③アクションのしやすさ ④聞きやすさ ⑤説得性

その結果：

- ① (i) 坪内訳(91秒) 中野訳(97秒) 小田島訳(92秒) 和田訳(136秒)
(ii) 坪内訳(83秒) 中野訳(80秒) 小田島訳(75秒) 和田訳(105秒)
- ② 壤によるしゃべりやすさの順番：中野→小田島→和田→坪内
- ③ 壤によるアクションのしやすさの順番：小田島→中野→坪内→和田
- ④ 論者とモニター(2名)による聞きやすさの順番：中野→小田島→和田→坪内
- ⑤ 壤と論者とモニターによる場面への同化しやすさの順番：どれも一長一短

全体としての壤晴彦の感想：

坪内訳は、物足りないし現代語としてはしゃべりにくい。中野訳は、分かりやすいがしゃべりが講談調になってしまう。小田島訳は速くしゃべれるが台詞同士のつながりが感じられず覚えにくい。和田訳は演技の間が保てない。個人的には(『ヘンリー四世』の訳はないが)、読んでいて身の内から突き上げるように台詞が出てくるという点で、福田恒存の訳が好きだ。又、以前英文関係の学会でハムレットの第4独白を読み比べた時、三神勲・訳が一番評判よかった。

7、結語

・戯曲翻訳批評の必要性

『ロミオとジュリエット』の幕開けで道化の「この二時間を…」の口上があるが、和田の望むような正確で、日本語表現が正しく、意味もしっかりわかるような翻訳で上演したとしたら、おそらく三時間では足りまい。舞台転換に時間をかければ、四時間以上かかってしまうかも知れない。かつての日本におけるシェークスピア上演は、だらだらと長い訳文をとこところどころカットしてそこそこの上演時間に収めていたのである。これでは、外国映画のフィルムをとこところどころカットして、かつスローモーションで回すようなもので、感興が得られるはずなどなかったのである。小田島訳はいろいろ批判はあって当然ではあるが、短く早くという点では成功している。

1、で述べたように、戯曲翻訳に要求される点が多いが、一作品を通じその全てを満たせるような訳文は「神業」以外にはない。何を優先させるか。その優先順位は当該戯曲に対し適切なものか。適切だとしたら、優先した狙いが正しく実現されているか。舞台化した時、説得性をもった台詞になっているか。単なる印象批評でなく、そういった基準で戯曲翻訳の批評はなされねばなるまい。

これまで翻訳戯曲評なるものがはっきりとした形でなされたことは聞かない。今後、この分野が切り開かれ、日本の劇芸術の発展に寄与してゆくことを望みたい。

・紀要上の論争を望む

さて本稿であるが、先輩の論文を取り上げ、部分によっては不遜にも文句をつけている、ととられかねない箇所もあろう。そんなつもりは毛頭ないが、そうとられても構わないという気持ちで執筆した。

「著者と編集者と読者一人の三人しか読まない」と揶揄される大学紀要が活性化するためには、近しい者同士、分野を異にする者同士、見解を違える者同士が遠慮することなく論争する場となってゆくことが必要だろう。一昨年、論者は本紀要に『翻訳教育のススメ』なる小文をよせたが、反応はゼロであった。語学教員を挑発する記述をわざと入れていたにもかかわらずである。

論者は和田論文を、「翻訳基礎」「シナリオ研究」を担当する自分への叱咤激励と感じ、まともならないながらも本論考を書いた。この小文が読者の誰かを刺激し、大いなる反論、論者の無知の指摘などをいただけたら、嬉しく思う。そうした積み重ねが、やがては学術研究の質を高めてゆくことにつながるのではないだろうか。

* 註：

[坪内逍遙訳]

ヘスチ 閣下、我軍は既に退散しました。輓を脱された若駒のやうに、東西南北へと走って行きます。又は小学校の放課時といふ風で、めいめい家路へと、遊び場へと。

ウェス 好いお知らせです、ヘスチングズ卿。(急に態度を改めて) さう聞いた上は、すぐさま其方を捕縛するぞ、謀叛人め。それから、大監督、あんたも。モーブレー卿、あ

んたも、大叛逆罪として逮捕しますぞ。

兵士ら群至して三人の武器を取上げる。

モーブ（憤然として）さういふことをなすって、それで公明正大といへますか？

ウェス ^{きみ}足下たちの暴挙が然ういへるかい？

大監（ジョン王子に）かうまで誓約をお破りなさるか？

ジョン 此事に就いて特にどういふ誓約もしない。わたしは足下がたの陳情に応じて一切の積弊を矯正することを約束した、さうしてそれはわたしの名誉に懸けて、基督信者らしく、きつと履行するであらう。併し、足下がたは謀叛人である以上、その謀叛相当、其行為相当の罰を受ける覚悟をするが好い。事を起したのが既に愚挙であったのだが、うっかり出陣して、うっかり解散するとは、いよいよ愚な話であった。…太鼓を鳴らして解散した奴等を追撃なさい。今日かう安全の利を収めたのは全く神のお力である。…だれか此叛賊どもを謀叛人の正当の臥床^{ねどこ}でもあり、終焉所でもある斬首台^{くびきりだい}まで警護して行け。

[中野好夫訳]

ヘースティングズ 閣下、わが軍はすでに解散いたしました。軛を解かれた若牛同様、東へ西へ、南へ北へと、めいめい、思いのままに散じてしまいました。放課後の児童にも似て、それぞれの家路へ、また遊び場へと、急いでまいったものと存じます。

ウェストモランド ヘースティングズ卿、これは吉報。しからば、早速まずその方だが、叛逆罪のゆえをもって捕縛いたす。同じく大主教閣下、モーブレー卿、その方どももまた、大逆罪によって逮捕いたすゆえに、さよう心得ろ。

モーブレー おのれ、これが武人の正しい道だとでもいうのか？

ウェストモランド ならば、そもそもその方たちの蜂起は？

大主教 こうして誓約をさえ破ろうとされるのか？

ランカスター 誓約などいたさぬ。ただその方たち申し出の積弊だけは、たしかに改めることを約束をしたにすぎぬ。事実そのことは、われらが名誉にかけても、キリスト教徒として万遺憾なく、きつと実行いたすつもり。したが、その方らの企て、すなわち叛乱行為に対しては、よいか、当然の処罰が下るものと覚悟しなければならぬぞ。それにいたしても、そもそもの蜂起からしてが浅慮至極。のこのこと出てまいって、あっさり解散などとは、いよいよもって阿呆千万。さ、軍鼓を鳴らして掃討戦をかけるのだ。今日この無血の勝利は一に神の賜物、われらの力ではない。さ、これら叛逆人どもは、断頭台へと送ってやるがよい。それこそ恰好のベッド、息の引き取り場所と申すものだ。

[小田島雄志訳]

ヘースティングズ 大司教閣下、わが軍はすでに解散しておりました、頸木を解かれた若駒同様、東へ西へ、南へ北へ、思いのままに散っております、あるいは放課後の小学生同様、それぞれの家に、遊び場に、いそいでおります。

ウェストモランド いい知らせだな、ヘースティングズ卿、そう聞いたからには、謀反人め、

反逆罪のかどによりおまえを逮捕する。大司教閣下、それに、モーブレイ卿、二人とも大逆罪のゆえをもって縄を受けるがいい。

モーブレイ ええい、これが公明正大なやりかたか？

ウェストモランド おまえたちの暴挙が公明正大と言えるか？

大司教 こうして誓約を破られるのか？

ランカスター 誓約などしておらぬ、私はただ、おまえたちの苦情を聞いて、ただすべきものは改めようと約束したにすぎぬ、それは名誉にかけて、キリスト教徒にふさわしく遺漏なきよう履行するつもりだ。だが、おまえたち謀反人は、謀反を企て、実行した以上、その行為に相当する罰を受けるものと覚悟するがいい。おまえたちが兵を起こすこと自体、浅はかというほかない、出陣してすぐ解散する愚かさには、あきれざるをえない。高らかに軍鼓を鳴らし、四散した敵に追い討ちをかけるのだ、今日無血の勝利を収めえたのはひとえに神のみ心なのだ。謀反人どもを連れて行け、行く先はもちろん、断頭台だ、それこそ反逆者の目を閉じさせるにふさわしい寝台だ。

・和田正美訳は本文 5、にあり。・英文併記の都合上、各訳文は横書きにした。 了